

## 鷗外の『大戦学理』

荻原桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2011年10月26日受付、2011年12月5日受理)

### 要旨

明治32(1899)年6月19日森鷗外は陸軍第12師団軍医部長として小倉に赴任以来、明治35(1902)年3月26日東京の第1師団軍医部長に任じられて小倉を出発するまでの3年たらずの期間に、さまざまな活動をとおして小倉の人々に大きな影響を残した。

「戦争には数多の種類あり然れども皆政略上行為たることを失はず」というプロイセンの軍人クラウゼヴィッツ『戦争論』の邦訳は、小倉時代の鷗外によって始められた。鷗外と『戦争論』の関係はドイツ留学時代に始まり、小倉では師団将校らに講義をおこなったことから、邦訳『戦論』を執筆したのである。

また、鷗外は小倉時代には美学に関する訳書を刊行したほか、9年の歳月をかけたアンデルセンの『即興詩人』を完訳させて刊行するなど、旺盛な翻訳活動をしている。後年同書を改版するとき「予が壮時の筆に成れる」と述べるとおり、小倉時代の鷗外は翻訳活動に筆をふるうことで後日の文学における再活動に備えた。公務のかたわら余暇を利用して執筆した翻訳は膨大な量がある。

鷗外の小倉着任は、『門司新報』が逸早く報じ、『福岡日日新聞』では最初に福岡を訪れた際、インタビューを実施している<sup>1</sup>。『福岡日日新聞』では、明治32(1899)年9月26日「我をして九州の富人たらしめば」、明治33(1900)年1月1日「鷗外漁史とは誰ぞ」、同年1月27日「森博士の書簡」、同年7月26日から同月30日「普通教育の軍人精神に及ぼす影響」、同年9月22日から同月30日「戦時糧餉談」、明治34(1901)年1月1日「小倉安国寺の記」、明治35(1902)年1月1日「即非年譜」を掲載している。『門司新報』で明治34(1901)年1月1日「小倉安国寺古冢の記」、明治35(1902)年1月1日「和氣清麻呂と足立山と」掲載している。鷗外は地域新聞への積極的な投稿によって、地域の啓蒙に努めた。

講演活動である「普通教育の軍人精神に及ぼす影響」(企救郡教育支会)や「フリドリヒ・パウルゼン氏倫理説の梗概」(福岡県教育会総会)なども活発に行っている。

軍医部長としての職務にも励み、師団創設後3カ月ばかりで退任した前軍医部長のあとを受け、小倉師団の軍医部の基礎をかためるために力を注いだ。定期巡閲、徴兵視察、衛生隊演習、病院視察など多忙な毎日をおくるなか、出張先では史跡、旧墓を探したり、素封家に古美術を見せてもらったりして、たえず自己の教養や見聞を広めた。そのほか、軍管理の勝

山病院での市民診療や小倉第14聯隊の給水法、小倉市上水道の水源にも関心をよせていた。

小倉を出発する前々日明治35（1902）年3月24日には、小倉偕行社で告別講演「洋学の盛衰を論ず」を実施し、小倉赴任の最初から最後まで弛まず、自他ともに許す近代日本の知性として努力を惜しまなかったのである。

## はじめに

明治32（1899）年6月19日、森鷗外が陸軍第12師団軍医部長として小倉に赴任以来、東京の第1師団軍医部長に任じられて明治35（1902）年3月26日小倉を出発するまでの3年たらずの期間に、鷗外はさまざまな活動をとおして小倉の人々に大きな影響を残した。

鷗外は、明治32（1899）年6月、大村西崖との共編でハルトマン『審美学第二巻 美の哲学』の大綱を訳述し、同年同月29日『審美綱領 上・下』を春陽堂から刊行し、明治33（1900）年2月、フォルケルト「美学上の時事問題」を訳述し、『審美新説』を春陽堂から刊行する。また、明治34（1901）年2月から10月まで『めさまし草』に連載していたリイブマンの「実相分析」中の美学に関する部分を抄訳して『審美極致論』として明治35年2月、春陽堂から刊行している。

また、鷗外は明治34（1901）年1月15日「微雨。即興詩人を譯し畢る」（「小倉日記」）と記し、アンデルセンがイタリア旅行をもとに書いた自伝的小説『即興詩人』の翻訳を完成させ、9年の歳月をかけた『即興詩人』の翻訳を明治35（1902）年2月、春陽堂から刊行している。

さらに、鷗外はプロイセンの将軍クラウゼヴィッツ『戦争論』の一部を翻訳した。『戦争論』との関係は、鷗外のドイツ留学時代に始まり、小倉での明治32（1899）年12月12日から偕行社で火土を定例日として開始された『戦争論』講義をへて、非売品「森林太郎・翻訳戦術理論」第12師団司令部印刷『戦論』として刊行されている。これに関しては、明治34（1901）年6月26日の「小倉日記」に、「戦論の譯を停む」と記している。その後、鷗外が小倉を離れた翌年、明治36（1903）年11月には、軍事教育会発行『大戦学理』が、全3巻のうち第1巻第2章までは鷗外訳、それ以降は陸軍士官学校訳（フランス語からの重訳）で刊行された。また、岩波書店発行『鷗外全集』（34巻昭和49（1974）年2月）には「大戦学理巻一巻二」として所収されている。また、帰京2年後の明治37（1904）年2月2日から門司新報主筆二階堂行文の頼みで、『門司新報』に、森林太郎訳『戦論』が五月まで連載される。この掲載開始から一週間後にあたる2月10日に、ロシアへの宣戦布告がなされ日露戦争が始まるのである。

鷗外の『大戦学理』を陸軍軍医としての鷗外の仕事としてとらえるだけでなく、鷗外の文

学に「戦論」での思想がどう活かされているかを鷗外の文学活動との関わりから論究する。さらに、軍医に固執しつつ小説を書き続けた鷗外の真実とは何かについて考える。

## 1. 軍医としての鷗外

日清戦争（明治27年～28年）・日露戦争（明治37年～38年）は、明治日本が国運をかけた対外戦争である。鷗外は、中路兵站軍医部長、第2軍兵站軍医部長として日清戦争に従軍、「徂征日記」「日清役自紀」を記し、台湾総督府陸軍局軍医部長として台湾占領戦に参加、「台湾総督府医報草藁」を記した。また、第2軍軍医部長として日露戦争に従軍、『うた日記』（明治40年春陽堂刊）に「第二軍軍医部長臨時報告」を記した。平岡敏夫氏が「鷗外における軍医という問題は、さらには官僚という問題にまで及ぶもので、文学とのかかわりにおいて、鷗外像の上で決定的な意味を持たされている」<sup>2</sup>と述べるように軍医としての鷗外を知ることは鷗外の文学活動を考えるうえで重要である。

中野重治氏は「今日の大きい作家たちは、いわばその職業の枠のなかで、文学という一つの区切りのなかで比較的大きいというにとどまるのにたいして、漱石や鷗外は、文学という区切りをふくむ全人生の区切りにおいて大きかったからである」<sup>3</sup>と述べたうえで、鷗外の偉大さを次のように指摘する<sup>4</sup>。

これら二人の人は、国と国民と道徳とを常に問題とした。日本という国と、日本人という人びとについて、問題を社会心理においても捕えて解決を見いだそうとした。この二人にとっては、哲学も、行政も、人と人との関係も、文学としてあらわれる前に人間学としてあらわれた。それだから、彼らは、文学と哲学とを、国の政治と個人の意欲とを、統一においてむすびつけ、つねに何かの調和をそこに見つけようとした。（中略）彼らは、問題を文学という区切りのなかだけで扱わなかったと同時に、そのことによって、同じく区切りとしての行政、区切りとしての道徳のなかだけでも扱わぬということになった。あらゆる区切りとしてのカテゴリーを決して無視することなく、しかしそれらを越えて人生の全領域に直面したこと、すくなくとも直面しようとしたこと、そしてそれを、文学者の、あるいは文学者もちまえの特権的な義務としてしたこと、ここに彼らの文学者としての偉大、文学をその責任において社会的に高めた勲があった。

鷗外が軍医官僚としての生を全うしながらも、文学に留まり続けた意志には、明治の知識人としての矜持があり、鷗外の精神が明哲である証明であった。鷗外は明治14（1881）年7月、東京大学医学部を卒業後しばらくは父の医院を手伝うが、同年12月、陸軍省に入って陸軍軍医副（中尉相当）に任じられ東京陸軍病院課僚を命ぜられる。明治15（1882）年5月、

陸軍軍医本部課僚となり、主としてプロイセン陸軍衛生制度を調査し、『医政全集稿本』を編述する。

明治17(1884)年6月、陸軍省より衛生制度調査及び軍隊衛生学研究のためドイツへ官費留学を命ぜられ、同年8月横浜を出航、同年10月ベルリンに着いたのちライプツィヒに移りホフマン教授に師事する。明治18(1885)年2月から「日本兵食論」「日本家屋論」をドイツ語で執筆し始める。明治19(1886)年3月、地学協会でナウマンの日本に関する演説に反論、同年12月ナウマンの「日本聯島の地と民と」への反論「日本に関する真相」を発表する。明治21(1888)年7月ベルリンをたち同年9月に帰京、同年12月陸軍軍医学校及び同大校教官となる。明治22(1889)年3月海軍中將男爵赤松則良長女登志子と結婚、『衛生新誌』を創刊する。明治26(1893)年『衛生療病志』誌上で医学界の反動勢力を批判、11月1等軍医正に進み、軍医学校長になる。

明治27(1894)年8月清国と開戦、軍医部長として出征する。明治28(1895)年4月日清講和条約調印、同年8月台湾総督府陸軍軍医部長となったが同年9月解任され、同年10月東京に凱旋する。明治31(1898)年10月近衛師団軍医部長兼軍医学校長となる。明治32(1899)年6月小倉に第12師団軍医部長として赴任するが、同年6月27日母峰宛書簡には「左遷」の文字がみえるように鷗外には「得意なる境界には無之候」という境地であった。明治35(1902)年3月第1師団軍医部長として帰京後、明治37(1904)年2月日露戦争勃発、同年3月第2軍軍医部長として出征する。

明治39(1906)年1月東京に凱旋し、同年6月賀古鶴所とともに山県有朋を囲む歌会「常磐会」を起す。明治40(1907)年11月陸軍軍医総監となり陸軍省医務局長を命じられる。大正5(1916)年4月陸軍軍医局長を辞し予備役に編入され、大正6(1917)年11月宮内省帝室博物館総長兼図書頭に就任、在職中は図書僚の整備と蔵書目録の作成に努め、大正8(1919)年9月には帝国美術院院長に就任する。大正11(1922)年7月61歳の生涯を閉じるのである。遺言は賀古鶴所によって口述筆記された。

余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍皆縁故アレドモ生死別ル、瞬間ア  
ラユル外形的取扱ヒヲ辞ス森林太郎トシテ死セントス

墓ハ森林太郎ノ外一字モホル可ラズ書ハ中村不折ニ依託シ宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ  
取りヤメモヲ請フ手續ハソレゾリアルベシコレ唯一ノ友人ニ云ヒ残スモノシテ何人ノ容喙  
ヲモ許サズ

この遺書にある言葉をみても解るとおり、鷗外は生涯を閉じるにあたって大学卒業後のほとんどの時間と労力を注ぎ込んだ「宮内省陸軍」に訣別の意志を表している。「先生の欠勤は恐らく局長時代を通じて十日位」<sup>5</sup>(山田弘倫『軍医森鷗外』)というから、その軍医としての

仕事ぶりは誰にも異論はないであろう。軍医としての鷗外はその死の直前まで自己の使命を放棄しなかったのである。軍医という職業に固執し続けた鷗外の真意はその死の直前の遺言によく表れている。

成瀬正勝氏が「一面このような生活的方面と文学的方面との切り離しというものが、精神の自由のために、きわめて適切な処置を施す」<sup>6</sup>と指摘するように、国家の要職に在り続けた鷗外は、本当の自分を投影できる人物を創りだすことで精神のバランスを取っていたのではないか。翻訳にも史伝にも鷗外の描く作品の人物には孤独な魂が宿っている。軍医としての生涯が鷗外に課した「良識は秩序と諦念との状態から生れていた」<sup>7</sup>というのが鷗外文学の秘所であるといえる。

鷗外が約40年にわたる陸軍軍医生活のなかで、第12師団軍医部長として小倉に単身赴任した明治32(1899)年6月19日から第1師団軍医部長として小倉を出発する明治35(1902)年3月26日までの約3年は「雌伏の秋(とき)」して位置づけされている。「小倉赴任の初めは不平の余り隠流などの号を用ひるが、次第に師団長井上光中将、参謀長山根武亮工兵大佐にも深く信任せられ、又公私の友人も出来て愉快の日を過した」(森潤三郎『鷗外森林太郎』)というように軍務に励む様子がうかがわれる。軍医としての鷗外がそのエリート意識から脱却して人間的にも成長したといわれる小倉時代に作成された鷗外の『大戦学理』について考察する。

## 2. 鷗外の『大戦学理』

鷗外ドイツ留学最後の年、明治21(1888)年1月の日記(『独逸日記』)にクラウゼヴィッツ『戦争論』に関する部分が登場する<sup>8</sup>。

十八日。夜早川来る。余ためにクラウゼキッツ Clausewitz の兵書を講ず。クラウゼキッツは兵事哲学者とも謂ふべき人なり。その書文旨深隧、独逸留学の日本将校等能く之を解すること莫し。是より早川のために講筵を開くこと毎週二回。

「クラウゼキッツ」とはプロイセンの軍人、戦術家であり19世紀における最高の理論家である。「兵書」とは“Vom Krieg”1832-34(『戦争論』)の第1巻「戦の本質」第2巻「戦の理論」をさす。鷗外をクラウゼヴィッツ『戦争論』に結びつけた「早川」は「一八四八(嘉永二)年七月八日、甲斐(山梨県)東八代郡上矢作村の田村家に生れた」<sup>9</sup>が早川伝子と結婚し田村家から勘当されたあと早川家に入籍して早川怡与造と名乗るようになる。この早川が明治21年1月16日ドイツ留学中の鷗外の宿を訪ね、その2日後から原書によるクラウゼヴィッツ『戦争論』の「講筵」がなされるのである。この「早川大尉が、即ちのちの参謀次長陸軍

中将田村怡与造（一八五四—一九〇三）である。彼は明治十五年末ドイツに留学して、明治二十一年に帰朝、爾来参謀勤務に終始した。のち参謀総長陸軍大将川上操六（一八四六—一九九）を補佐して参謀本部の確立に努め、また日露戦争に対する戦争計画に心を傾注したが、戦争勃発の前年、過労のために斃れた。彼は当時の日本陸軍を革新するに多大の寄与を致した偉材<sup>10</sup>であった。

ドイツ留学中に会った『戦争論』に関わるもう一人の重要な人物に巽軒井上哲次郎（1855～1944）がいる。井上は筑前生れの哲学者で、号を巽軒といい、ドイツ留学後、東京大学で日本人初の哲学教授となった人物である。明治18（1885）年10月1日の『独逸日記』には「巽軒はこの回始て相見る。容貌古怪、面上少しく痘癍あり。雄弁快談傍ら人なきが若し。その詩集及東洋哲学史の草稿を示さる。この夜独逸に来しより以来始て東洋文章の事を談ず。快言ふべからず」と述べ、明治20（1887）年11月9日の『独逸日記』には「仏教耶蘇教」の優劣に関する議論が記されている。

井上巽軒の仏教耶蘇教と whichever 勝れると云ふ論を聞く。大意謂ふ。仏の如来には人性なし。耶蘇の神に優れり。仏の大乗は因果を説く。而して重きを後身に帰せず。その小乗との差此に在り。耶蘇の未来説に優れり。仏は覚者なり。耶蘇の神子と称するに優れり云々。余問ひて曰く。今哲学には定論と認むる者なきに似たり何如。曰く凡そ万有学に根する者は皆今日の哲学なり。その他フエヒネル Fechner の心理 Psychologie, カント Kant の道徳 Ethik 皆定論なり。

井上哲次郎から哲学について教えを受けていた鷗外は、「クラウゼヴィッツは兵事哲学者とも謂ふべき人なり」（明治21年1月18日『独逸日記』）の書いた『戦争論』に出会うのである。ロンドン留学で鷗外は奇遇にも明哲な人物と書物に同時に触れていたのである。

この出来事は、12年後の明治32（1899）年12月12日「井上中将以下の将校予をしてクラウゼヴィッツ Clausewitz の戦論を偕行社に講ぜしむ。是日始て講筵を開く」<sup>11</sup>（『小倉日記』）という記述につながっていく。『独逸日記』は、はじめ漢文で書かれていたものを、小倉時代に現在のかたち書き改めたものとされるが、鷗外の生前には公開されず、日の目をみたのは、昭和十二年岩波書店版鷗外全集においてであったという経緯は、『小倉日記』もまた、永らくその所在が不明となっており、初めて公けにされたのは、昭和二十七年岩波書店版の全集においてであったという経緯と重なる。石井郁男氏が指摘するように「『独逸日記』の書き直しと『小倉日記』を書きついでいった日々は完全に重なりあっている」<sup>12</sup>という奇縁がある。『小倉日記』には、『戦争論』の「講筵」に関する記事が頻繁に書き記されている。

（明治三十三年一月）九日。 戦論を講じ畢りて帰る途上、後藤幾太郎に邂逅す。

(明治三十三年四月)七日。 午後二時偕行社に至りて、クラウゼヴィッツを講ずることを繼ぐ。

(明治三十四年六月)二十六日。 戦論の譯を停む。

また、同じころの書簡にも『戦争論』に関わる記事がみえる。

○火土の両曜日は佛語をならひに行くかはりに兵法を講義に行き申候此方も師団長はじめ大熱心なれば中々おろそかにはなり不申候 (明治32年12月19日 森潤三郎宛書簡)

○クラウゼキッツは休つゞけゆゑ小生提議して大庭君を定日に宅へ招き筆記いたさせ候  
○東京行は今月末頃かと申事に候東京にてクラウゼキッツを休めぬやうに師団長閣下より話され候 (明治33年6月20日 肥前国佐世保 山根武亮宛書簡)

○兵学講義は依然少しづゝながらつゞけ居候 (明治33年11月1日 賀古鶴所宛書簡)

小倉着任早々、鷗外は精力的に軍医としての仕事をこなしている。明治32年6月26日小倉軍医学会に出席し、同年同月30日には小倉城内の衛戍病院分院を視察している。その後、福岡、佐賀、久留米衛戍病院と連隊をめぐり、同年7月14日初めて歩兵第47連隊、工兵營を、同年同月15日騎兵營を視察している。『小倉日記』に窺えるように鷗外が精力的に北九州各地を視察していることは確かだ。「衛生隊の野営訓練に力を入れたのを始め、衛生隊演習、定期巡閲、病院視察、徴兵視察などを行っている」ばかりか「その余暇には、周辺の地理、歴史を調べて考古学、仏教などの知識を独自の革袋に蓄えていた」<sup>13</sup>のである。小倉での鷗外は、近代衛生学、陸軍衛生制度を整備し軍医としての仕事を全うした。そのなかでもクラウゼヴィッツ『戦争論』の翻訳は軍医としての重要な仕事であったのである。

巻末に「以下士官学校翻訳大戦学理第一巻卷三戦略篇二接続ス 明治三十四年六月二十六日 森林太郎識」という「識語」のある石版刷の第12師団版『戦論』が印行されたのは明治34(1901)年6月であり、『小倉日記』には「識語」に書かれた同年6月24日に翻訳の筆を擱いたことが記されている。『戦論』の本文は漢字片仮名交じり文で非売品である。「戦論序」には次のように記されていた。

#### 戦論序

戦論ヲ著シタル者ヲフオン、クラウゼキッツト為スクラウゼキッツ名ハカルル普魯西國ノ大将ナリ千七百八十年ブルグニ生ル昔テ兵ヲシヤルンホルストニ学ブ千八百十年伯林士官学校ノ教官ト為リ皇太子侍講を兼ヌ千八百十三年ブリユツヘルノ本營ノ參謀トナリ次デワルモオデンノ參謀長トナル千八百十五年第三軍団參謀長ニ還ル千八百十

八年伯林士官学校長トナル千八百十八年砲兵科ニ転シ任ニプレスラウニ赴キ砲兵監タリ此歳ノ暮ニ至リテ伯林ニ還リグナイゼナウノ参謀長トナル千八百三十一年三月ポオゼンニ至リ十一月七日又プレスラウニ入り十六日虎列拉病ニ罹リ卒ス

戦論ハクラウゼキッツノ士官学校教官兼皇太子侍講タリシ日ノ起稿スル所ニ係ル当時普国ニハフリドリヒキルヘルム第三世位ニ在リ皇太子ハ後フリドリヒキルヘルム第四世タリクラウゼキッツノ書ヲ講シタル初ノ年ニハ王ノ年四十皇太子ノ年十五ニシテクラウゼキッツノ年三十ナリキ彼普佛役ノ未エルセリエ宮中ニ戴冠式ヲ挙ゲタルキルヘルム第一世ハ当時皇太子ノ弟ニシテ年甫メテ十三ナリキクラウゼキッツハ千八百十年此書ノ稿ヲ起シタル後軍務控徳久シク操觚ヲ廢シ千八百十六年ニ至リテ纔ニ又其藁ヲ継グコトヲ得タリ而シテ其業ノ最モ進ミシハ其千八百十八年士官学校長ト為リシ後ニ在リ既ニシテクラウゼキッツハ砲兵科ニ転シ官事又執掌タリ乃チ其未定稿ヲ裏ミテ篋底ニ蔵セリ何ゾ凶ランクラウゼキッツハ復タ之ヲ啓クニ及バズシテ逝カントハ戦論ハクラウゼキッツノ未亡人マリイノ手ニ依リテ世ニ公ニセラレタリマリイハプリユウル伯ノ女ニシテ学識アリ自ラ形管ヲ擲テ此書ニ叙シテ曰ク妾ハ幸ニ王家ノ恩蔭ヲ辱ウシ小公子ノ保姆タリ他日公子人ト成リテ此書ヲ読ミ給フニ至ラバ妾ノ願足りナント所謂公子ハ後ノフリドリヒ第四世ナリ

マリイフオンクラウゼキッツノ世ニ公ニスル所ノ遺稿ハ全部十卷ニシテ其刊行ハ千八百三十二年ヨリ千八百三十八年ニ至ル而シテ其初三卷ハ即チ戦論ナリ

明治三十二年十二月 於小倉

森 林太郎識

明治36(1903)年11月5日には、軍事教育会発行の『大戦学理 卷の一 卷の二』が刊行された。これも『戦論』と同じく非売品である。「明治三十六年十月二十九日於第一師団軍医部 陸軍軍医監 森林太郎識」として、鷗外は「大戦學理卷一至卷二譯本の来歴」について次のように述べている。

- 一、此譯本は予が陸軍中将井上光、陸軍少将山根武亮兩閣下の囑に依りて作りたるものなり初め予の伯林に在るや故陸軍中将田村怡興造閣下予に此原本を講ぜんことを需めらる予之に應じて卷一の過半を講ず山根閣下當時亦伯林に在りて此顛末を知らる是井上、山根兩閣下の予に此譯本を作ることを囑せられし所以なり
- 二、予の此譯本を作るや陸軍歩兵少佐大庭景一君予の口述するところを筆記せられたり故に大庭君は此譯本の成就に與りて力あるものなり
- 三、此譯本は初め題して戦論と云ふ是れ獨逸原本の「ユウベル、デン、クリイヒ」Ueber den Krieg と題したるに従ふなり此譯本の始て第十二師團司令部に石印せらるるや亦此舊題目を用ゐたりき



- 四、初め予は原本全部譯せんことを期したりき既にして陸軍士官學校の仏蘭西譯本に就いて之を重譯し卷三以下既に稿を脱せしを聞き予は翻譯の業を癡せり大戦學理の題號は仏蘭西譯本の始て之を命じ仕官學校重譯本の襲用する所に従ふなり
- 五、原本既に難解の書と稱せらる予の譯本の始て印刷せらるるや又難解の評ありき然れども予の之を譯するや原文の義を咀嚼して而る後國語を以て之を出し其際一字一句妄りに増減することなかりしは予の責任を帯びて言明することを得る所なり
- 六、陸軍少将高木作藏閣下は此譯本を取りて仕官學校重譯本と合刊することを認諾せられたり

鷗外の訳になるのは全3巻からなる原書の第1巻第2章までであるが、「譯本の来歴」に見るように、第1巻第3章以下及び第2、第3巻は陸軍士官學校訳として続刊された。第12師団団長井上光は若いころから『孫氏の兵法』を研究するなど、日清戦争では大山巖第2軍參謀長として活躍した人物である。

また、鷗外帰京後、『戦論』は門司新報主筆の二階堂行文の頼みで、明治37(1904)年2月から5月にかけて『門司新報』に連載された。「明治廿七年二月二日」の『門司新報』には「クラウゼヴィッツ氏『戦論』(一)」題したものが掲載された。

#### クラウゼヴィッツ氏戦論(一)

陸軍々医監 森林太郎君譯述

森鷗外博士第十二師団軍医部長として小倉に在住の際師団将校の為普魯西著名の大將クラウゼヴィッツ氏戦論を譯述せられしを筆記したる者あり戦論は(甲)戦の本質(乙)戦の理論(丙)戦略(丁)交戦(戊)戦闘力(己)防禦(庚)攻撃(辛)作戦計量の十章に分ち各章又節目に分ち最も詳密に論述したるものとす博士の譯述は其の甲乙二章に止りたれども戦論中の眼目は略ほ之れに由つて窺ふを得べく現下日露間時局の急迫せるに際し戦論の研究は最も重要にして且つ最も趣味深きを信す依て博士に請ひ本誌に掲起して之を公にするの承諾を得たれば本日以後続掲する所あるべし読者請ふ此意を諒せられよ(編者識)

『戦論』「巻の三」に関しては、草稿断片が発見されている<sup>14</sup>。小林安司氏によって、昭和44年11月、行橋市の旧家陣山家で発見された『戦論』翻訳の新資料について報告されている<sup>15</sup>。

行橋市陣山家蔵の鷗外自筆草稿である。昭和四十五年十二月一日発行の小倉郷土会『記録』一五号に小林安司氏によって紹介された。この草稿の発見により、鷗外は巻の

二以降の譯述を進めていたことが分る。草稿は全五紙で渡邊旅団長の挨拶状の裏面に記されたもの一紙、他の四紙は師団軍医部の報告書の裏面に共に毛筆で記されている。

「陣山家の新資料」については、昭和44年11月24日『読売新聞』（西部）の夕刊に「鷗外『戦論』原稿行橋で見つかる」と題しての報道があった。「福岡県行橋市元永、小倉高校教諭陣山方で『戦論』の原稿の一部が見つかった」<sup>16</sup>というのである。また、軍事教育会発行の『大戦学理』は現在九州工業大学が所蔵している<sup>17</sup>。

クラウゼヴィッツ『戦争論』翻訳に関しては、戦前に馬込健之助訳『戦争論』上・下巻（岩波文庫、1936年）があり、そのなかで「森氏の手になるものは流石に名訳であって、完璧に近いものであるが」（士官学校訳本は）重訳である上に、明に誤と看做さるべき箇所少なからず、且つ恣なる敷衍又は省略があり、原著書の真意は著しく歪み曲げられている」と訳者あとがきがある<sup>18</sup>。また、戦後には「淡徳三郎訳（抄訳、徳間書店、1965年）、清水多吉訳（現代思潮社、1966年）と篠田英雄訳（岩波書店、1968年）が出版されている」<sup>19</sup>とあるように、『戦争論』への関心は、森鷗外の『大戦学理』（軍事教育会、1903年）以来現在にも続いている。

その理由の一つとして、篠田英雄氏は「『戦争論』の本来の構成部分が、戦争に関する哲学的考察であることは言うまでもない。しかしそればかりでなく、戦争の経過や勝敗の決定が、戦争の担い手であるところの政治家、将帥、上級および下級指揮官、一般の兵ならびに国民に与えるさまざまな精神的影響に戦争心理学的、或は極めて特殊な人間学的分析を施している個所が随所に見出される、これは戦争という異常な社会現象に対する珍重すべき観察として、読者の関心を惹くに十分である」<sup>20</sup>と指摘している。

鷗外にとって、クラウゼヴィッツ『戦争論』翻訳は軍職としての仕事ではあったが、ドイツ留学以来持ち続けた『戦争論』への関心は鷗外自身の「戦争という異常な社会現象に対する珍重すべき観察」にあったというのである。

### 3. 二つの翻訳について

明治32（1899）年6月19日第12師団軍医部長となって小倉にやってきた鷗外は、軍医部長の仕事をこなすかわら、さまざまな活動を行うが、そのなかでも『即興詩人』と『戦論』の翻訳は鷗外の文筆の力量を知るうえで重要である。

鷗外は小倉に来る7年前、明治25（1892）年9月10日からアンデルセンの“Improvisatoren”の翻訳を始め、小倉在住の明治34（1901）年1月15日翻訳を完了している。『即興詩人』はアンデルセンがイタリア旅行をもとにして書いた自伝的小説で、即興詩人アントニオの波

乱にみちた半生が描かれる。明治25年11月より『しがらみ草紙』に連載を始め、日記には「あまりに長きものなれば倦むときは来ずやと氣遣はる」と記された鷗外訳『即興詩人』は9年の歳月をかけて翻訳され、明治35(1902)年9月春陽堂から菊判上下2冊の豪華本として刊行された。鷗外のこの翻訳は、長島要一氏が指摘するように単なる西洋文学の紹介ではなく、文学作品を通じての「文化の翻訳」<sup>21</sup>と言えるものである。

「微雨。夜即興詩人を訳し畢る」(明治34(1901)年1月15日『小倉日記』)

鷗外はドイツ留学中にデンハルト訳のレクラム文庫版の『即興詩人』を手に入れ重訳した<sup>22</sup>。『戦論』がクラウゼヴィッツの“Vom Kriege”の翻訳であり、ドイツ語の原書を正確に翻訳したものであったのに対して、『即興詩人』の翻訳は原作であるデンマーク語からの重訳という事情もあって、鷗外訳『即興詩人』は「アンデルセン不在」<sup>23</sup>の作品となっている。鷗外は、軍医としての仕事『戦論』翻訳では直訳を目指し、文学者としての仕事『即興詩人』翻訳では意訳を実施したことになる。西洋の書物を翻訳するとき、鷗外はこうした2つの方法をダイナミックに使い分けていたことになる。鷗外は正確な語学力、豊富な知識、柔軟な西洋文化の受容態勢で、西洋文化は自国の文化同等に自由に操作できる能力を兼ね備えていた。「危急存亡の秋」(明治32年6月27日母峰宛書簡)にいう「秋」(とき)とは実際の大陰暦7月から9月を指すのではなく、成瀬正勝氏が「秋は鷗外にその清澄と透徹とを与えた」<sup>24</sup>と指摘するように、「欧州的知性の冷厳と日本の感性の寂靜」<sup>25</sup>から鷗外は危難が迫っている「秋」(とき)を強く意識していたということである。軍医という職業柄、目前に迫る日露の大戦を、新設された第12師団軍医部長として感知していたのである。そんな危機感のなかでも『即興詩人』は翻訳され続けた。翻訳完成後、明治35年7月7日下志津陣営に於いて「初版例言」には次のように述べている。

- 一、即興詩人は璉馬の人 HANS CHRISTIAN ANDERSEN(1805-1875)の作にして、原本の初版は一八三四年に世に公にせられぬ。
- 二、この訳は明治二十五年九月十日稿を起し、三十四年一月十五日完成す。ほとんど九星霜を経たり。然れども軍職の身に在るを以て、稿を属するは、大抵夜間、もしくは大祭日日曜日にして家に在り客に接せざる際においてす。予は既に、歳月の久しき、嗜好のしばしば変じ、文致の画一なり難きを憾み、また筆を擱くことの頻りして、興に乗じて揮瀉すること能はざるを惜みたりき。世あるいは予その職を曠しくして、縦に述作に耽ると謂ふ。冤もまた甚しきかな。
- 三、文中加特力教の語多し。印刷成れる後、我国公教会の定訳あるを知りぬ。而れども遂に改刪すること能はず。

四、この書は印するに四号活字を以てせり。予の母の、年老い目力衰へて、毎に予の著作を読むことを嗜めるは、この書の字形の大なるを選びし所以の一なり。夫れ字形は大なり。然れども紙面ほとんど余白を留めず、段落猶かつ連続して書し、以て紙数をして太だ加はらざらしむることを得たり。

鷗外が『即興詩人』翻訳で成し遂げたことの一つに、「和文の伝統的な語りものの雅俗折衷体の流れに、さらに漢文の簡潔と欧文の論理性を加えて成立した、鷗外独自のスタイル」<sup>26</sup>がある。「軍職」の合間をぬって完成された『即興詩人』には、鷗外の進むような美しい雅文体が綴られている。石井郁男氏は「『即興詩人』にはギリシア神話や聖書の話、古代ローマやルネサンスの芸術・文学の話がちりばめられた格好の欧米文化紹介の書物でもあった」<sup>27</sup>と述べるが、鷗外は「欧米文化紹介」として「軍職」である『戦論』の翻訳と「冤もまた甚しき」なかで『即興詩人』の翻訳を並行で実施したのである。「予は既に、歳月の久しき、嗜好のしばしば変じ、文致の画一なり難きを憾み、また筆を擱くことの頻りして、興に乗じて揮瀉すること能はざるを惜みたりき」と言いながらも完訳した矜持を滲ませている。

## おわりに

松本清張は、「鷗外の「生涯」を見ると、反権力とか権力否定とかいったものはなく、それどころか権力志向そのものの道を歩いている。権力志向そのものというのが云い過ぎでないのは、それが鷗外個人の性格によるものではなく、彼が生きた官僚の世界が権力の道であるからだ。鷗外が軍医総監・医務局長に到達するまでの闘争の履歴を回顧すれば足りる」<sup>28</sup>（『両像・森鷗外』）と述べている。

文学者としての鷗外は、ハルトマン『審美綱領 上・下』（明治32年6月、春陽堂）を刊行、明治34年1月、アンデルセン『即興詩人』の翻訳を完成させ、同年6月、クラウゼヴィッツ『戦争論』を翻訳した。地域新聞にも寄稿し、『福岡日日新聞』に「我をして九州の富人たらしめば」「鷗外漁史とは誰ぞ」を、『門司新報』に「小倉安国寺古家の記」「和気清麻呂と足立山と」を載せ、地域の啓蒙に努めた。講演活動では「普通教育の軍人精神に及ぼす影響」（企救郡教育支会）や「フリドリヒ・パウルゼン氏倫理説の梗概」（福岡県教育会総会）なども活発に行っている。こうしたことから、鷗外が小倉を去ったあとも、昭和10（1935）年に結成された小倉郷土会を中心に森鷗外に関する講演会や座談会や展示会が実施されてきた。清張が『或る「小倉日記」伝』で描いた田上耕作もその参加者の一人であった。機関誌『豊前』は、昭和12（1937）年12月第9号で廃刊されたが、清張の蔵書にふくまれていたことから購読していたと考えられる<sup>29</sup>。昭和27（1952）年11月25日実施された鷗外旧居顕彰のために小倉を訪れた鷗外長男森於菟氏を囲む会には、清張も出席している。鷗外への関心は、

ふるさと小倉に住む清張にとっては必然性をおびたことであった。昭和28(1953)年12月、朝日新聞東京本社への転勤のため小倉を去った清張ではあるが、心に刻みつけられた鷗外の「巨大な存在」<sup>30</sup>は、さまざまな作品世界で再生され続けるのである。

『両像・森鷗外』は、原題「二醫官傳」として、昭和60(1985)年5月から『文藝春秋』に掲載され、平成2(1990)年8月に加筆改題され単行本として刊行された。しかし、「構成上、手を加えたい部分がある」として決定稿を書きあげようとしたが、清張の病没によって未完の遺作となった。

平野謙氏は「作者独特の主體的な感情移入」<sup>31</sup>であると指摘しているが、清張の感情移入は鷗外という人間の身辺を最期まで離れることができなかった。清張は「陸軍を退めてからの執筆活動の旺盛ぶりをみるがよい。考証伝記の長篇三つをとってもたいへんな情熱である。あれは執念というものがこもっている。それは文章をみてもわかる。執拗な文章だ。がんらいが簡潔な文体だからだまされるが、「抽斎」「蘭軒」「霞亭」いずれをとっても、その文章がしつこくしつこく続いている。気魄と云おうか、執念と云おうか、デーモンがある」<sup>32</sup>(『両像・森鷗外』)と述べる。

また、「官僚鷗外」「文士鷗外」という「両像・森鷗外」という清張の視点について、桶谷秀昭氏は「松本清張は、生きてゐるときの鷗外の「両像」にあくまで固執した」<sup>33</sup>と指摘する。清張は、生身の鷗外の根源的に抱え込んでいた鬱憤に魂の強震を感じ取ったのである。赤塚正幸氏は「清張の関心は、軍医・森林太郎あるいは官吏・森林太郎が、作家・森林太郎であることの落差にあった」<sup>34</sup>と述べているが、清張は、「落差」というよりも、森鷗外という仮面の下に潜む一人の人間の孤独な苦悩する魂に共鳴したのでないだろうか。清張は鷗外の遺書について「いずれにしても「宮内省陸軍皆縁故アレドモ生死別ル、瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス」の字句を見て、私は鷗外がはじめて死後「文学者」であることを宣言したのだと思う」<sup>35</sup>と述べている。

「鷗外漁史とは誰ぞ」以来、官吏でもなく文学者でもなく葉巻を吹かす如く煙幕を張ってきた彼は、あるいは自己は官吏であっても文学者ではない、したがってで弟子は取らないと云っていた鷗外は、遺言により官吏から訣別したのである。(『両像・森鷗外』)

清張は鷗外が石見人・森林太郎となろうとしたとき、鷗外の仮面をはっきりと見たのである。平岡敏夫氏は、「『両像・森鷗外』は、たんに松本清張における〈鷗外〉像の完結にとどまらず、松本清張その人の生涯をも語っているとも考えられる」<sup>36</sup>と指摘する。

現実を変えることのできない鷗外は、書くことによって自己本来の面目にたどりつこうとするのである。鷗外が自己本来の面目にかえて遺書に、「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」と書いたのは、自己の選ばざるを得なかった生き方と選びたかった生き方があまり

にもかへ離れていたからである。鷗外にとって「渋江抽斎」「伊沢蘭軒」「北条霞亭」といった人物の史伝を書くことは、自己の生を根本的に見つめ直し生き直すことでもあった。桶谷秀昭氏が「官僚の世界とはそんなに甘いものではない。陸軍軍医科という部局が本科との比重において、いかに軽視されてゐるか、軍医総監といふ地位に昇つても、そのことに屈託してゐる鷗外の俗情を直視しないのは、文学主義といふ反俗の衣の下におのれの俗情を隠蔽してかへりみない思ひあがりではないのか。松本清張のポレミック（喧嘩腰）の口調には、さういふ声がこめられてゐるのがきこえる」<sup>37</sup>と指摘するように清張の鷗外観はあくまでも官僚としての文学者鷗外である。

文学者鷗外は、軍医鷗外の仕事を含めて考察しないとその真実は解明されない。鷗外がもっていた問題は、明治という近代日本の知性が抱え込んでいたさまざまな事情とダイナミックに絡みあつてできたものである。鷗外の『大戦学理』はまさにその中心にあつてその意味を開示されなければならない。

## 註

- \* 鷗外『大戦学理』の本文は『鷗外全集 第34巻』岩波書店、昭和49（1974）年11月、鷗外『書簡』の本文は『鷗外全集 第36巻』岩波書店、昭和50（1975）年3月、鷗外「年譜」は『鷗外全集 第38巻』岩波全集、昭和50（1975）年6月に拠つた。

- 1 明治32（1899）年7月8、9日の2回にわたる「森軍医部長を訪ふ」が、九州で鷗外が挙げた第一声となつた。『森鷗外展 をりをりの微笑』北九州市立文学館、2007年10月、12頁。
- 2 平岡敏夫「軍医」では、「磯貝英夫『森鷗外—明治二十年代を中心に』（明治書院、1979年）は「医学者鷗外と文学者鷗外」を三極構造でとらえるべきだとして、医学・文学・公生涯、言いかえれば科学・芸術・政治とした。医学・公生涯を合わせて軍医官僚と括することもできよう」と指摘する。『国文学 解釈と教材の研究』1998年1月、22頁。
- 3 中野重治「漱石と鷗外との位置と役割」『鷗外 その側面』ちくま学芸文庫、1994年9月、282頁。
- 4 中野重治 同掲書、282・283頁。
- 5 山田光倫『軍医森鷗外』文松堂書店、1943年6月、256頁。
- 6 成瀬正勝「鷗外と官僚」『森鷗外覚書』中公文庫、1980年11月、140頁。
- 7 成瀬正勝 同掲書、141頁。
- 8 『独逸日記 小倉日記 森鷗外全集13』ちくま文庫、1996年7月、214頁。
- 9 石井郁男「鷗外を『戦争論』に結びつけた男」『鷗外「小倉左遷」の謎』葦書房、1996年3月、145頁。

- 10 篠田英雄「あとがき」『戦争論』（上）[全3冊]岩波文庫、1968年2月、363頁。
- 11 『独逸日記 小倉日記 森鷗外全集13』前掲書、273頁。
- 12 石井郁男「小倉在勤中に鷗外が漢文の『在徳記』を『独逸日記』に書き直した」ことを指摘し「鷗外を『戦争論』に結びつけた男」について詳論している。前掲書、146頁。
- 13 手島宰三「第十二師団軍医部長としての鷗外」『森鷗外と北九州』北九州森鷗外記念会、1999年3月、131頁。
- 14 「後記」『鷗外全集 第34巻』岩波書店、1974年11月、780頁。
- 15 小林安司「森鷗外の『戦論』訳述—新資料に触れて」『小林安司著作集 鷗外の小倉』北九州森鷗外記念会、2003年4月、84頁。
- 16 小林安司氏は、『読売新聞』の記事から「陣山さんが家に伝わる古文書を整理しているとき見つけたもので、「森鷗外博士戦術論原稿紙」と表書きされた封筒に「鷗外博士当師団司令部在勤中、公務の余暇に書かれた戦論の原稿、ある人から貰った。云々」という手紙とともにはいっていたもの。その原稿は明治三十四年三月第十二師団管下部隊患者一覧表、薬価格一覧表と同年四月渡辺章旅団長から鷗外あてにきた手紙の裏に書かれており、右端に「四十八回」右下に二十四から二十八までのページ数が記されている。ドイツ語まじりの原稿でところどころ書き直しや、そう入、強調すべき点に丸印がされている」—などとかなり詳細に紹介されている」と述べている。同掲書、99頁。
- 17 石井郁男「『戦争論』翻訳前史」において九州工業大学所蔵の『大戦学理』について「案内された最上階の五階の倉庫には、埃にまみれた歴大な陸軍資料があった。日清・日露戦争関係の文献が山のようにあった。（中略）実は戦後、占領軍から軍関係図書は廃棄処分という命令が出され、九州工業大学図書館でも書類上は廃棄の手続きが取られていたが、現実には生き残っている」と述べている。『森鷗外と『戦争論』—「小倉左遷人事」の真実—』芙蓉書房出版、2009年9月、88—89頁。
- 18 馬込健之助「訳者あとがき」『戦争論』上・下岩波文庫、1936年。
- 19 川村康之「訳者あとがき」『戦争論 レクラム版』日本クラウゼヴィッツ学会、2001年7月、415頁。
- 20 篠田英雄 前掲書、359—360頁。
- 21 長島要一『森鷗外 文化の翻訳者』岩波文庫、2005年10月、6頁。
- 22 長島要一は「鷗外の使用したのは、デンマーク語の原作第三版を底本としたデンハルト訳」であったと指摘し「重訳をしたことによって必然的に誤解が生じていた」と述べている。同掲書、53頁。
- 23 長島要一 同掲書、43頁。
- 24 成瀬正勝 「鷗外の秋」前掲書、137頁。
- 25 成瀬正勝 同掲書、136頁。

- 26 田中美代子「解説 再び母の部屋へ」『即興詩人 森鷗外全集 10』1995年12月、479頁。
- 27 石井郁男「『即興詩人』と『戦論』の翻訳」『森鷗外と北九州』北九州森鷗外記念会、1999年3月、100頁。
- 28 松本清張『両像・森鷗外』文春文庫、1997年11月、282頁。
- 29 『特別企画展〈ふるさと小倉〉シリーズ2』北九州市立松本清張記念館、1999年6月、12頁。
- 30 松本清張 前掲書、93頁。
- 31 平野謙「解説」『或る「小倉日記」伝』新潮文庫、1965年6月、404頁。
- 32 松本清張 前掲書、258 - 259頁。
- 33 桶谷秀昭「解説」『両像・森鷗外』文春文庫、1997年11月、309頁。
- 34 赤塚正幸「松本清張にとって森鷗外とは」『松本清張記念館一周年記念シンポジウム』『松本清張研究』創刊号、北九州市立松本清張記念館、2000年3月、32頁。
- 35 松本清張 前掲書、289頁。
- 36 平岡敏夫『両像・森鷗外』「特集松本清張と森鷗外」『松本清張研究 創刊号』砂書房、1996年9月、39頁。
- 37 桶谷秀昭 前掲書、301頁。



## **A Study on Ogai's "TAISENGAKURI"**

Keiko OGIHARA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

No English abstract